

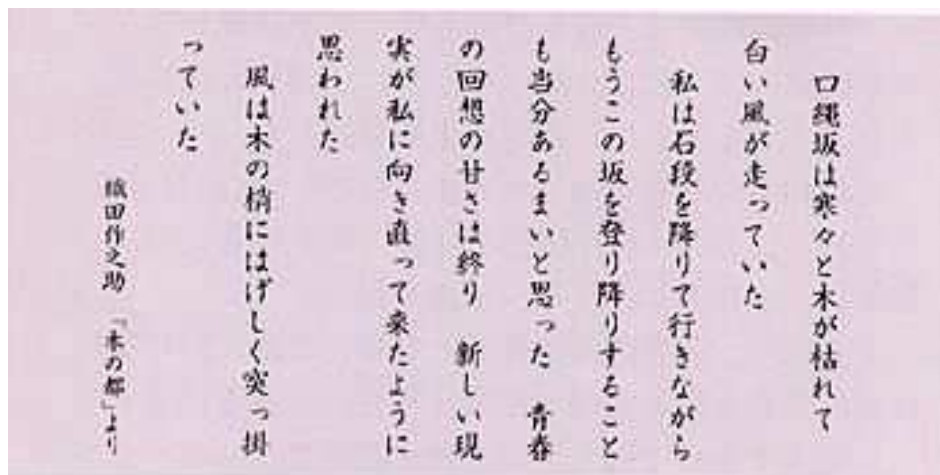
12 織田 作之助文学碑

■場所

天王寺区夕陽丘町 5
口縄坂

■交通

地下鉄：四天王寺夕陽ヶ丘
(2号出口)



織田 作之助(1913年～1947年)

織田作之助は、大正2年(1913年)大阪市東区東平野町七丁目(現天王寺区上汐四丁目)に生まれ、昭和22年(1947年)1月10日死去した。

東平野第一尋常高等小学校(現生魂小学校)、高津中学校(現高津高等学校)を経て、第三高等学校(現京都大学)にすすんだ。

三高時代、岸田国士の戯曲に傾倒して、初めは劇作家を望んでいたが、その後、スタンダールに憑かれ、小説家に転じた。また、後年井原西鶴に傾倒した。

昭和11年、青山光二らと同人誌『海風』を創刊し、同13年、同誌に発表した「雨」が武田麟

太郎に注目された。昭和 14 年、「俗臭」が芥川賞候補となり、最後まで賞をあらそった。また、昭和 15 年、「夫婦善哉」が改造社の第一回文芸推薦作品となり、『文芸』に再録され、文壇にデビューした。

戦後、「六白金星」「アド・バルーン」「世相」「競馬」などを発表し、一躍流行作家となり、肉体文学、デカダンス文学の旗手として、坂口安吾、太宰治、石川淳らとともに、新戯作派、無頼派作家と称された。

昭和 21 年、「土曜夫人」を読売新聞に連載。小説の舞台がいよいよ東京に移ろうとするのに先立ち、取材をかねて上京するが、仕事に忙殺され、そのため大量の咯血をして、翌 22 年急逝した。

死の直前に書いた「可能性の文学」は、志賀直哉に代表される私小説への厳しい批判として話題になった。

「木の都」は、昭和 19 年『新潮』に発表された作品で、古き大阪への作者自身のノスタルジーが色濃くただよび、大阪的庶民気質や大阪人情への深い共感が読み取れるすぐれた小品だといわれている。

墓所は、大阪市天王寺区城南寺町の楞嚴寺。